

# 8号始まり物語（仮）

朽葉周

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

作者のオ리지の一人、八雲さん（8号）の昔話。

年末の書き治めとして大体一日で書上げた乱文。8号さんが昔話を淡々と語る話。

目次

P r o l o g u e		1
0 1 宇宙怪獣掃討		3
0 2 トップレス		7
0 3 ノノ		11
0 4 覚醒		16
0 5 別れ		22
E p i l o g u e		25

……は？ 俺の昔話を聞きたい？ なんでもまた。

確かに俺の昔の事ってあんまり話した覚えは無いけど……何故って？ 俺の昔話なんて他の連中に比べるとどうにも面白みに掛けるからだよ。

考えても見ろ。異民になってオーロラ・フィールド接続された世界群を再建した英雄も居れば、レベル6に至って汎超能力者として世界を影から守り続けたヒーローもいる。GN粒子で世界を一つに結びつけ、金属異性体との調停を早め犠牲者を減らした英雄も居れば、全てが溶けた紅い世界を巻き戻し、繰り返す終焉を乗り越えて見せた奴もいた。

——そんな中に俺だ。正直な話、連中と比べると俺の話しと言うのは相当に見劣りしてしまう。比較対象にするのもおこがましい程度の話でしかないんだよ。

……それでもいいから話せって？

お前も大概変な趣味をしているよな。俺の話を聞くよりも先にやるべき事なんて幾らでもあるんじゃないのか？

何、其方だけ話を聞いておいて、私に聞かせないのは不公平だ？

此方が提供した情報の対価分は話せ……それは先に言っておくべきだろう。後だしは交渉材料としては弱いんだぞ？

……あー、わかった。わかったから怒るなって。話す、話すよ。

とはいえ果てさて、何処から話した物か。それじゃ、先ず俺が生まれる前の話をしよう。

生まれる前とは如何いう意味かって？ まあ、いふなれば前世、その死後の話だ。前世において死んじまった俺は、その死後、魂の状態で神様……つばい奴にであった。

……いや、わかつてる。魂だの神様だの胡散臭いってのは理解している。特にお前みたいな奴だとそういう明確な定義が存在し無い物は扱い辛いもんなあ。とはいえ超能力者がいて、世界は科学万能と言うわけじゃないのは実証されてるんだ。仮に“有る”として話を進

めるぞ？

んでだな、死後、俺はその神様と対話して、少しだけ来世における優遇措置を得るに至ったわけだ。

……神様がどんなで、何で優遇措置を得られたか？

神様がどんなだったか、というところ……割烹着を着たピンクっぽい髪の毛のお姉さんだった。

……割烹着つてのは、Japanese Maid—Servantの着衣の事だな。……なんで神様がそんな格好してたかって？ 俺が知るかよ。神様の趣味じゃね？ だから知らないって。

話を進めるぞ。んで、その神様。マジカルだとかアンバーだとか名乗ってた女神なんだけど、その神様が娯楽に飢えていたとかで、本来存在しないキーパーソン、『特異点』を物語に投入した場合、その変化を観測したい、とかなんとか。

俺が選ばれた理由に関しては本当の偶然。魂の輪廻に手を差し入れて、偶々手榴弾にひっかかったのが俺だったんだとか。

特に命題とかを与えられたわけでもなかったんで、俺はその特異点としての役割を受け入れる事にしたんだよ。

## 01 宇宙怪獣掃討

そのあと俺は世界に生れ落ちる事になったんだが、正直に言うとおれ自身、自分が何時生まれたのかという事を把握していない。

如何いうことか、だつて？　まず俺と言う存在が如何いうモノとして世界に生れ落ちたのか、からを説明する必要があるだろう。

先ず、俺と言う存在。地球帝国宇宙軍、太陽系外延遊撃部隊直属、第六世代恒星間航行決戦兵器。そう、俺は生物としてではなく、マシンとしてこの世界に生を受けた。

名はバスターマシン8号。……あー、まあ、これが本名と言えば本名か。今は八雲つて名乗ってるがな。

で、だ。俺が生まれた時期に関してだが、これが今一つはつきりしていない。というか、おれ自身が生まれた時代と言うのが何処を指すべきかが解らないんだよ。

先ず最初に俺が生み出されたのは、人工知能としての形だ。俺の姉に当るバスターマシン7号、彼女も人の形をしたマシンなんだけど、彼女と一緒にユング大統領の勅命の下に開発されたデータの塊として先ず俺達は形を成した。その後、そのデータの器としてナノマシンの集合体の肉体を得る事になったんだ。

あー、確かにそういう点ではお前らも近い存在ではあるよな。とはいえ、俺の領域に至るまで何千年掛かるか……ま、気長に開発していくといいさ。

そんなわけで生まれた俺達だが、気付いたときには俺は俺としての、前世の自我を含めた8号としての自我を確立させていたわけだ。で、自我を確立させた俺が先ず最初に何をしたかと言うと……何もなかったわけなんだな、これが。

というのも、俺がはつきりとした自我を持って行動可能な状態に至ったのが、既にユング大統領が人口冬眠に入る直前。人類は宇宙超獣との戦いでほぼ壊滅状態。今にも太陽系に引籠もろうとするそのカウントダウンのまっ最中だったんだよ。

先に稼動を開始していた7号は、大統領らの眠るエルトリウムを抱

き、無人バスター軍団を育てながら人類守護の任についた。正直に言う、もう既にこの時点でこの世界における物語と言うのは既に終わっていた。次に『物語』が始まるのは一万二千年後。正直備えるにしても時間と言うものが有り余りすぎていたわけだ。

其処で俺がやったのが、本来の任務。太陽系外延遊撃任務だ。

嘗て俺の居た地球と言う惑星は、太陽を喰う『宇宙怪獣』の脅威に晒されていた。この宇宙怪獣らは人類の奮闘の果てに、なんとかそれらの主戦力を殲滅するに至った。特にグレートガンバスター、ガンバスター4、5、6号機の三機の活躍は大きかったと言える。

で、この宇宙怪獣の大半の殲滅を達したはいいものの、だからといって宇宙怪獣の脅威が完全に払拭できたかと言えばそうでもない。何せ宇宙怪獣と言うのはそれこそ宇宙に星の数程蔓延っていた。俺の任務と言うのは、その宇宙怪獣残党の殲滅と言うものだ。

やり方は至って簡単。餌に釣られた宇宙怪獣を罫で嵌めて袋叩きにしただけ。

具体的な説明？ えー、先ず俺の持つ能力に関する説明をしようか。俺の持つ能力の一つに、指揮能力つてのが存在する。まあ正式名称は別にあっただけけど、俺も忘れた。……いやあ、ロボが忘れるのか、つて言われると困るのは困るんだけど、一万年も使わない言葉だと流石にな。

で、その指揮能力によって指揮される軍団。バスター軍団という、量産型の無人バスターマシンだ。コレは一応俺の姉に当るバスターマシン7号も持つ機能だ。

シズラーって呼ばれる量産型ガンバスター型のヒトガタ機動兵器。ナノマシンによってかなり量産性の上っているコイツラの大軍を率いて、俺は先ず当時の人類の生存圏——地球とシリウス——から離れた位置に拠点を築く事にした。その地点つてのが、バーナード星系の地球型惑星だ。

……いや、んなモノは無いつてんだろ？ 確かにこの世界にはそんな惑星は存在しない。ただ、俺の居たあの世界には存在してたんだよ。そもそもの話、あの世界における太陽系つてのが冥王星の外に魔

王、智王、神無月、雷王と、此処に比べて大分差異があったんだって。地球って言っても別の惑星と考えたほうが良いぞ。

……おーけー。続きだな。バーナード星系に居を構えた俺達は、次に自己増殖を開始した。ナノマシンの集合体であった俺達八号系バスター軍団だ。バーナード星系に存在していたデブリやら惑星やらを素材に、宇宙怪獣と戦う為の戦力を一気に増産させた。とはいえ生産ペースなんて知れたもので、大して良いペースともいえないんだが、長い年限津で見れば十分な速度だったんだ。

で、バーナード星系において俺は宇宙怪獣を呼び寄せ、そこで連中を一つ一つ潰していったわけだ。

……宇宙怪獣を如何やって呼び寄せたか、だって？

宇宙怪獣って言うのは、かなり単純な生物で、既に倒されていたリーダー格を除けば、殆ど本能で動くような連中ばかりだったんだよ。

で、その連中の本能に、その世界で主流となっていたバニシングドライブってワープ航法があるんだけど、そのワープ航法を使うときに発生する波動、ソレを感じすると、その方向に向かって只管直進する性質……走バニシングドライブウェブってのがあって、つまりはこのバニシングドライブウェブってのを人為的……機械的かな？に、全宇宙方向に向かって発振したわけだ。

……ああ、そうだ。それだと取り逃しの可能性や、一度に許容量を越える敵と戦う可能性も存在している。そこで考えたのが、誘導迎撃とは別の偵察攻撃部隊だ。

言ってしまうと無人機部隊なんだが、コイツラを宇宙に放つ事で星系図の書換をやったりと、別方面でも利益を得られたのは後から笑ったな。

ただ、コレを続けていく中で幾つか遭遇した問題があった。というのが、この偵察攻撃部隊が稀に大型の部隊を発見する事があったんだよ。

戦力的にいうなら、俺の率いる8号部隊の総戦力で当れば十分迎撃可能なんだけど、俺が出撃して奇襲攻撃を仕掛ければ、そこまで戦力



を掛ける必要も無い、と言うような戦場だ。

当然俺は出撃するわけなんだけど、連中の下にたどり着くためには俺もワープをする必要があったわけだ。そう、当然連中はそのワープ波を感じてしまう。おかげで奇襲が察知される事もあれば、宇宙怪獣の別働隊に奇襲を返される、なんてこともあった。

そこで急務とされたのが新式のワープ航法。……無茶なのは当時の俺も理解してたんだけど、他に思いつく人間も居なけりゃ、それを無茶だと諫めてくれる存在も無かったんだよ。

それに俺には前世の自我由来の知識や発想つてのがあったんだ。結果から見ればこの開発は成功。見事に新式の……アイスセカンドを用いないワープ航法の開発に成功しちゃったんだよ。

因みにコレが後に異世界を旅する中で重要な技術に成るとは、マサカこの当時の俺は思っても無かったんだよ。そもそも異世界を旅することに成るなんて全く思ってたかったし。

で、コレを機に更に宇宙怪獣を狩る戦いの中で、俺率いる8号部隊はその一万年と二千年の間に徐々に進化を開始したんだ。元々はアイスセカンドを利用した縮退炉式だった俺達は、次第にアイスセカンドを……あの世界における基本的なエネルギーを利用しない新型縮退炉に。俺の切り札であるフィジカルリアクターはその形を進化させ、有効範囲を広げつつもその姿を形に残す必要性も無くした。

そうして大体一万年が経過したわけだ。……端折りすぎって？

そうは言われても、人の営みから外れた時間の流れで戦ってたんだ。宇宙怪獣を倒しては自給自足の補給、つて言うのを繰り返していただけだよ。

とりあえず話を戻すが、一万年後。漸く、少なくとも人類の到達可能範囲からの宇宙怪獣の完全駆逐を確認できたってことで、俺は部隊の一部を引き連れて地球に帰還することになった。あと二千年もすればガンバスターとそのパイロット達が帰ってくるはずだったからな。準備、と言うわけでもないが、そろそろ一度帰っておくべきだと判断したんだよ。

## 02 トッププレス

で、地球圏に戻ったのは良いんだけど、その当時地球圏はちょっと困った事になっていた。なんと人類の文明がかなり後退して、その当時は人類は大気圏の外に出ることにすら齷齪あくせくするほどにまで衰退していたのだ。

慌てて影から人類文明の復興に手を貸しつつ、同時に俺は姉である七号への接触を試みたんだ。地球圏は七号の領域だったからな。

ところがだ。地球圏絶対防衛システムである7号バスター軍団は太陽系を覆うようにして確かに存在しているというのに、肝心のシステムの中枢たる7号が何処にも居ない。

仕方無しに俺単独で地球圏の復興に尽力していたわけなのだが、この辺りから少しキナクさい事になってきた。

というのが、『トッププレス』たちの登場という世界の変化だった。

トッププレスというのは、所謂超能力者、って解釈でいい、と思う。前頭葉の異常な活動による異能力、宇宙を満たすエーテルと反応する為、まるで頭が青白い炎で燃えているようにも見えるその力。問題は、この力を七号系バスター軍団が宇宙怪獣と同質の物であると判断してしまった点だ。

そもそもの話、宇宙怪獣って言う連中は生物の癖にワープしたりビームを撃つたりと、色々謎な能力を秘めていたんだが、後々ソレは連中の超能力のようなものではないのか、と言う話が有った。どうもそれは事実にかかなり近かったらしい。まあ超能力というよりは連中の生態の一部に含まれるみたいでもあったんだが。

で、そんな宇宙怪獣の超・能力。何故か人類の中からソレと同じものに目覚める人間が現れ始めた。それがトッププレス能力。

幼少期の一時期にしかこの能力は発現せず、一定年齢を過ぎると「あがり」と呼ばれる能力喪失を経験し、一般人に戻る。

のだが、7号系バスター軍団はこのトッププレスを目指して地球に侵攻を開始した。

俺は慌てて7号系バスター軍団に接触しようとしたのだが、残念な

がら俺と7号は同型機ながらも指揮系統が別。更に長い年月に独自の進化を遂げていたらしく、俺から七号系のバスター軍団に命令を出すという事は不可能だった。

そんな中で人類が選んだのは、宇宙怪獣と戦うという選択肢だ。

人類は地球目掛けて侵攻を開始した七号系バスター軍団を、嘗て人類を絶滅の危機に追いやったとされる『宇宙怪獣』と誤認。縮退炉を取り外されてお蔵入りしていたバスターマシン二桁の系列。縮退炉の変わりにフィジカルキャンセラー、トップレス能力を動力とするシステムを搭載し、7号系バスター軍団との戦闘を開始した。

……俺は手を出さなかったのか、って？

確かに俺の任務は地球の、人類の防衛なんだけど、7号系のバスター軍団はその機能を役割別に細分化していた所為で、十分当時の人類でも対抗可能なレベルにまで落ちていた。

……それに俺は、有る意味でその戦いをチャンスだと捉えていたんだよ。

人類は争いの中でこそ進化する。これは俺が生み出された経緯を考えれば十分真実味がある。連中みたいな事を言うって？ 流石に永遠の闘争なんてのは御免被るけどね。それが出来なかったからこそあの人類は地球圏に引籠もり、結果衰退しちゃったんだし。

で、新たな脅威が現れないとも限らない。そう考えて、人類の外宇宙に対する警戒心を上げる為にも、俺は7号系バスター軍団……宇宙怪獣と人類の戦いを許容する事にした。

縮退炉を外し、フィジカルキャンセラーを用いて戦う二桁台のバスターマシンは、正直な話シヨボイ。本物の宇宙怪獣と戦えばそれこそ一溜りも無いだろうとは感じつつも、けれどもその技術自体は人類発展のためにかんがりの燃料となったのは間違いないだろう。人類が得た新たな外宇宙航行のための技術であるエーテルエンジン。更に嘗ての木星軌道に残されたエルトリウム級、名も無き三番艦を新たな木星とし、人類はその巨大な戦艦への『入植』を開始したのだ。

人類と言うのは素晴らしいと、あのときこそしみじみと感じたものだ。一万二千年が経過したとはいえ人類は確りと生き残り、あまつさ

え文明が退化していたというのに、少しきつかけを与えてやるだけで再び人類は宇宙へと足を踏み出したのだ。

本当に凄いなと思う、人類。俺とて人類の成果の果て、あるいはその極地から生み出された存在ではあるが、だからといって俺単体で人類という群に勝利を得る事ができるかといわれると、純粋な殲滅戦は別として、その他の芸術や文化などの面での競い合いにおける必勝を確約するのは到底不可能だ。

……まあ、これは俺の独自の考え方だ。お前にはお前なりの考え方で言うのもあるんだろう事はわかっている。思想は押し付けない。これも俺があの人類文明から学んだ事だ。

で、そんな人類の発展を目にしつつ、俺はと言うとこっそりと7号の探索を継続していた。一応7号系バスター軍団とも上下ではなく左右としての繋がりから情報提供を受ける事に成功し、どうやら7号系バスター軍団も七号の行方を捜していることを突き止める事に成功した。

なんでもあの馬鹿姉、宇宙空間で居眠りしている間に彗星にぶつかり、そのまま行方を晦ましたのだとか。阿呆丸出しである。もしかするとその彗星に取り込まれているのかもしれないと考えたのだが、どうやらその彗星、デブリと接触してか更に小さな彗星群に分かれて太陽系をグルグルと回っているのだとか。全ての彗星を確認しようと思うと、それこそバスター軍団を総動員する必要すらあるほどの天体だ。正直その時点で直接的な探索は諦めた。

……ん、勿論探索自体を諦めたわけではないぞ。幸い、俺はその世界に生れ落ちるに際して、有る程度の……概要程度の未来史を得ていたからな。7号は無事に火星に保護される可能性が高かった。出来ればソレまでに接触しなかったのだが、残念ながら7号はその機能の大半を封印し一般的なアンドロイド相当にまで擬態するセーフティーモードを持っており、その状態になってしまっていた当時、俺どころかその彼女本人の手足たる7号系バスター軍団でさえ彼女を補足することが困難な状況に陥ってしまった。

結局俺が彼女を再び補足したのは、地球圏の復興を始めてから更に

二千年。俺達が生まれてから約一万二千年もの年月が経過した後、あと十年もすれば、古き二人の英雄が帰還するのではないかという頃だった。

漸く発見された姉さん……バスターマシン7号。彼女の反応を最初に発見したのは、なんと地球ではなく火星における地方都市の一角での事だった。

といっても彼女を探知したのは俺ではなく、彼女の手足であるバスター軍団によるもの。擬態状態で何等かの信号を発信したらしい7号を探し、雷王星の巢からビーストロン級及びツインテール級が派遣され、彼女の回収に向ったのだという事を少し送れて報告された。

で、俺も慌てて先行したビーストロン級を追いかけたのだが、正確な位置を把握できていなかった俺は結局彼らに追いつくことが出来ず、漸く火星に到着した頃には、火星に送り込まれていた偵察機であるツインテール級が人類のバスターマシンによって破壊されてしまったあとだった。

しかも最悪だったのが、此方の探し人であるバスターマシン7号が、当時地球圏の平和を守ると自称するトッププレスの組織、フラタニティに回収されてしまっていた事だ。幸い7号をバスターマシンとしてではなく野良アンドロイドと認識していたおかげで面倒な状況にはなっていなかったが。

当時の事を考えると、俺や彼女のような一桁台のバスターマシンが下手に世に出してしまうと、確実に人類はその進歩の足を止めてしまう。何せ自分で言うのも何だが、俺や7号は間違いなく神の如き力を持っている。特に永い眠りについていた7号とは違い、一万二千年の年月の中で自己進化を繰り返していた俺なんかは、遺伝子細工をはじめめとして多分ビッグバンくらい起こす事もできる、ソレくらいの力を得てしまっていた。

ただでさえ一撃で惑星を真っ二つに出来るようなそんな超越的な力だ。出来れば人類に晒すことなく、秘密裏に此方に回収したい。そう考えて、俺は密かに彼女に接触する方法を考える事にした。

まあフラタニティに回収された7号を追ってビーストロン級がフ

ラタニティの基地に接近したのだが、残念ながら姉さんの回収には失敗した。まあツインテール級で失敗した時点で、ビーストロン級で回収できるとも思っていなかったのだが。

早々に7号系バスター軍団からの姉さんに対する接触を諦めた俺は、今度は地球側から姉さんに対しての接触を試みてみる事にした。

というのも、当時の俺は地球圏の文明再建のために影ながら地球圏の経済活動にかなり手を貸していた。何しろ俺と言う存在はソレ単体でも地球圏の全ての情報を自由自在に操れるというとんでもないレベルの情報処理能力を持っているのだ。

これが現地球帝国再建の折にかなり役に立ったのは言うまでも無い。そんな俺の能力故に地球には色々な伝手が存在しており、これを利用してなんとかフラタニティに接触、もしくは潜入できないかと考えたのだ。

まあ、俺の視点から見れば一万年以上衰退した文明だし、有る程度地球側から圧を掛けつつ此方の力技を使えば潜入も出来るだろう、と軽く考えていたのだ。

……が、これが想定外の失敗と言う結果を受けてしまう。というのも、フラタニティに属する人間——つまりトッププレス。彼らと言うのは超・能力者。

俺が侵入しようとするたびに、予知能力か気配察知かは知らないが、その都度地味に警備が厳しくなるのだ。一応光学迷彩とかその手の技能があるには有るのだが、相手が透視能力を持っていて、此方のステルスを見破れないとも限らない。そして見破られてしまえば、そんな技術が存在するという事事態を知られてしまう。それこそ最悪の展開と言う奴だ。

しかもトッププレスの所属するそのフラタニティと言う組織。地球帝国軍の正規の命令系統からは若干外れているらしく、凍京を通しての依頼と言う形にしても中々に圧力を掛ける事ができなかった。

ガキ中心のいい加減な組織に見えるフラタニティだが、その実は中々に強固と言うか、ガードの固い組織となっていた。

そうしてなんとかフラタニティの姉さんに接触できないかと考え

ている最中、何時の間にか姉さんの反応が火星近隣のフラタニティの基地から木星方面へと移動していた。

因みにだが、その当時の地球圏における木星とは、本来の巨大なガスの星ではなく、旧地球帝国宇宙軍が建造していたエルトリウム級三番艦が居住地として無理矢理改造されてしまった物だ。最早戦艦としての機能は無く、良くてコロニー、ぶっちゃけ遺跡と呼ばれるような扱いをしている現『木星』だ。

雷王星の拠点に戻るつもりになったのかな？　なんて考えつつ、木星であればなんとか姉さんに接触できる可能性もあるのではないかと考え、即座にかの地へと急行する事に。

そうしてたどり着いた木星。入港・入国自体は簡単に済ませることが出来たのだが、肝心の姉さんの居場所が今一つ探知しきれない。システム的な探知能力で言えば互換性の有る7号系バスター軍団に劣るし、ネットワークから姉さんを探そうと思えば、今度はフラタニティの持つ特権によってその行動の殆どがネットワークに記録されていないと言う有様。

只でさえ木星なんてだだっ広い建造物の中なのだ。まさかこの宇宙時代にネットワークとオフラインだなんて。コレで如何やって探せと言うのだ。まさか直感で？

いつその事小型偵察機でも大量生産して、それを木星の中にばら撒いてやろうか、なんて事を考えていると、今度はフラタニティが7号系バスター軍団に対して喧嘩を売り始めた。

というのも、7号系バスター軍団の一部に、人類側から木星急行つて呼ばれてる一団が存在しているんだが、この木星急行と言うのの行動が太陽系内の定期巡回。人類側に見れば馬鹿げた量の宇宙怪獣が我が物顔で木星近辺を回遊しているのだ。下手に手を出せば被害が馬鹿にならないとして放置していたコレに、フラタニティは何故か突然手を出す事を決定した。

俺としては貴重な防衛戦力を削られるのも好ましくない。ので、実はその群の大半がガワだけのハリボテに差し替えられていたりするのだが、この木星急行をフラタニティのバスターマシンが見事迎撃。



まさに超・能力者ならではの、というべき、お手軽に絶対零度を軽く超越したマイナス一兆二千万度とかいう謎の一撃で木星急行を丸ごとカチカチに氷漬けにしてしまったのだ。

昔ながらのバスタービームって実は冷凍光線だったんだよなー、なんて懐かしみながらその様子を観察してた俺だったわけなのだが、此処で思わぬチャンスが巡ってきた。というのが、俺の肉眼で姉さんの姿を確認する事に成功したのだ。

エルトリウム級三番艦の外壁。そこで、バスターマシン90号の一撃で雪が降り積もる中、宇宙空間で雪だるまを作ってわーいわーい喜ぶ7号。……相変わらず天然さんみたいだ。

が問題は、姉さんが木星急行——サザゴラス級が撃墜された事に関して何の反応も示していないと言う点だ。

無人バスター軍団は地球圏絶対防衛システムであり、同時に姉さんの手足。木星急行撃破はいわば姉さんが小指を角にぶつけたに等しい損傷だというのに。

これはやはりシステムの問題が発生しているのか、あるいは姉さんが頭ぶつけて記憶喪失になったとか、バスターマシンが記憶喪失？んな馬鹿な、とは思いつつも姉さんならありえると思ってしまう。そんな可能性も考慮に入れなければならなくなってしまう。

如何した物かと考えているうちに姉さんはフラタニティと共にタイタンの基地へと移動してしまった。

タイタン周辺は監視が厳しく、帝国軍人どころかフラタニティの間でさえも不用意に出歩く事ができないほどの厳重な警戒態勢となっている。

というのも、全てはタイタンの底に眠る巡洋艦級。ギドドンガス級に関する話だ。

この巡洋艦級は嘗ての大戦……雷王星会戦の折に生き残った物と思われるギドドンガスがタイタンに封印されていた物で、地層の奥深くに厳重に封印され、尚且つ木星急行によって監視されていたのだ。

が、現地の人間、特にフラタニティに属する秘密クラブとかいう連中が、何を如何血迷って解釈したのか、タイタンの地底に眠るソレを

『異星人のバスターマシン』と解釈したらしい。

バスターマシンって言うのはそもそも地球人の純科学の結晶なのに、如何して異星人のバスターマシンなんて言葉が生まれたのか。

首をかしげながらもそのままタイタンを監視していると、姉さんが何かやらかしたらしく、静かなタイタンの地表が唐突に騒がしくなつた。

なんだろうなー、なんて思いながらタイタンのネットワークに侵入してみたところ、フラタニテイのアンドロイドが立ち入り禁止区域に侵入したのだとか。

多分姉さんの事だろうと当たりをつけて、そのままネットワークを監視していると、どうやら姉さんは冥王星に眠るトラントロワを回収しに行くらしい。……冥王星に？

少なくとも俺の感覚には、木星から同属……バスターマシンの反応なんて感知していないのだが、まあ此方としては好都合。タイタンにこっそりと侵入して、そのまま空港から姉さんの乗る船に同乗し、そこで姉さんに接触する事に漸く成功したのだった。

## 04 覚醒

ノノと名乗った姉さん。矢張り記憶系に異常が生じているらしく、俺に関する記憶どころか、自分の来歴に関する記憶までの一切合財が綺麗さっぱりなくなっていたらしい。

とりあえず自己紹介しつつ、自分が姉さんの昔の知り合いであった、程度の事を仄めかしつつ、軽く姉さんの額に触れておく。

接触箇所から伝達したデータ。それは、この一万年の間に蓄積された、俺自身の自己進化時のデータマップだ。

姉さん——7号も、完成時点で相当化物染みたスペックを誇る存在ではあるが、やはり時間における進化こそが俺達の強みなのだ。そこで姉さんにはいざと言うときに急速に自己進化が可能なように、俺のデータを元とした自己改良プログラムを入れておいたのだ。

どうせ冥王星にたどり着くまで多少時間も有るのだし。その間に内蔵システムの改良くらいはしておいても問題ないだろう、と判断したのだ。まあ本人に相談無くやったのは問題かもしれないが、身内の判断という事で。

一応言っておくが、その時記憶に関しては何も弄っていない。というのも、ボディーの改造はともかく、記憶と言うのは精神に密接に関連した物だ。当時の地球帝国宇宙軍の黄金期でさえ精神に関するものはかなりデリケートで、自由自在なんてのはとても無理だったのだ。そんな中で幾ら記憶喪失を直したいからといって精神に干渉するのは幾らなんでも無理が過ぎる。

俺も姉さんと再会できたことで安心してしまったという事も有って、どうせそのうち記憶も取り戻すだろうと判断し、結局記憶に関しては放置する事にしたのだ。

そんなわけで旅に出るから三週間ほど。漸くたどり着いたカロン宇宙港。……そんなところまで宇宙港があるのか、って？ 勿論無人だよ、無人。バスター軍団……宇宙怪獣監視のためにはカロンの更に外側に行く必要も有るしな。

で、其処にたどり着いたタイミングで丁度事件が発生した。いや、

起きたってのが正確かな。

どうも件のタイタンに眠っていた宇宙怪獣——その当時の人類は『重力変動体』って呼んでたんだが——を、『永遠のトップレス』と称した連中が目覚めさせてしまったらしい。

……まあ否定は出来ないな。態々人類の天敵を目覚めさせるなんて、俺から見ても馬鹿らしいと思う。まあ、何時か破られる封印なら、此方が解くのも一つの手では有る。無論準備が整っている状況ならの話だぞ？

で、そんなわけでタイタンに眠る異性人のバスターマシン復活を狙った連中……秘密クラブって組織が、7号系バスター軍団、宇宙怪獣をひきつけるって狙いの元姉さんを囮に冥王星に送り込んだ、つてのが真相だったわけだ。

おかげで真宇宙怪獣覚醒時に無人バスター軍団は二手に分裂させられて、余分な消耗を強いられる事になっちゃったわけなんだな、これが。

それからどうなったかって？ 焦るなよ、ちゃんとはなすつて。

話はちよつと戻って、カロン宇宙港の話だ。タイタンで事が起こった影響で、太陽系外延に布陣していたバスター軍団の群……ガス星雲と合わせて赤い天の川って呼ばれてただけど、これがあふれ出したんだ。タイタンで目覚めた宇宙怪獣を押しやるために活動が活発化したつてのが理由なんだが、この所為でカロン宇宙港がその機能を休止させちまったんだよな。

で、バスターマシンとしての機能を休止させてる姉さんだ。あわや冥王星手前のカロンで足止めかって所で、幸いフラタニテイの知り合いであるカシオってオツサンが貸切の宇宙バスで迎えに来たんだよ。

コレ幸いと俺達はカシオ氏のバスに乗り込んで、早速冥王星へ。カシオ氏に自己紹介なんかしつつ、たどり着いた冥王星。まあ、第二次カイパーベルト会戦、だっけ？ そのときに行方不明になったバスターマシン33号。これを姉さんは回収して自機にしたい、と考えてたみたいんだけど、二十年近く昔に行方不明になってた機体が無事に存在してるわけもなく、見事に白骨化してたんだよ。

……ロボが白骨化するのか、って？ あの世界のバスターマシンって何故か骨格持ってた内臓があったりして、割と人間っぽいつくりになってたんだよ。

んで、白骨化したトラントロワの前。そこで、急に姉さんが覚醒した。

……なんでって？ 知るかよ。ただまあ、その同時期、タイタンでは宇宙怪獣が復活して、正に地獄絵図のような有様になってた。7号系のバスター軍団が呼びかけてたのが漸く通じたのか、目覚めた宇宙怪獣に呼応したのか。あるいはお姉様——姉さんがそう慕ってたトップレス、ラルク・メルクマーレの危機を本当に絆から感じ取ったか。

結局ご都合主義的に覚醒した姉さんは、迎えを伴ってフィジカルリアクターでタイタンにワープしていったんだ。

俺？ 当然姉さんを追う……心算だったんだけど、よく考えるとその場には俺以外に此処まで送ってくれたカシオ氏がいたわけだ。

彼を放置して幾のは流石に忍びないだろう？ 何せ此処に放置してしまうと、下手すると暫く冥王星で野晒しになっちゃうんだから。

仕方ないので俺がカシオ氏を抱えてカロン無人宇宙港へ。当然道中カシオ氏に色々聞かれたわけで、話せる範疇だけ有る程度話しておいた。

そうして彼をカロンに送り届けた後になって、漸くタイタンに向ってワープしたんだ。ワープに連れて行かなかったのかって？ 心でも無い人間の時間をずらす程鬼畜じゃ無いよ。

で、タイタンにたどり着いたときには既に事は終わる直前。巡洋艦級をバスタービームで倒したその直後だったわけだ。その爆風をやり過ぎしつ、なんとか姉さんと合流したわけだ。姉さんは帝国宇宙軍にバスターマシン七号として認識されてしまった後だったんで、無線で姉さんと秘密裏にやり取りしつ、姿を隠して姉さんと合流。俺は姉さんの傍に出て、姉さん専用のお世話用アンドロイドと言うことに擬装して、その傍に席を確保する事に成功したんだよ。

で、此処までで話は綺麗に纏まったように見えるんだけど、問題は

此処から先だ。

タイタンの宇宙怪獣の覚醒に呼応して、エクセリオンブラックホールに封印されていた宇宙怪獣までが活動を活発化させ始めたんだ。

……だな、まずはエクセリオンブラックホールから説明しよう。

先ず最初に、エクセリオン級。第四世代型の宇宙戦艦で、縮退炉を装備した高性能な戦艦だ。大昔の宇宙怪獣との戦いのその最初期に建造され、後に多くの派生型が建造された傑作機だな。

このエクセリオンなんだが、壱番艦エクセリオンは、地球圏に進行してきた宇宙怪獣の群を抑えるために、縮退炉を暴走させてブラックホールになったんだ。

これが地球圏第十一番惑星ブラックホールエクセリオン。当時は既に色々データが失われたり言葉がなまったりで、『ブラックホールエグゼリヲ』って呼ばれてたんだけど。

本来ならこのブラックホールエクセリオン、10番惑星雷王星と一緒に7号系バスター軍団の資源になるはずだったんだけど、予想外にもこのブラックホールに対して適応進化してしまった宇宙怪獣が現れたんだ。それが後にエグゼリヲ重力変動体と呼ばれる宇宙怪獣だ。

人類とバスター軍団の調停という名目でブラックホールエグゼリヲを訪れた帝国軍だったんだけど、丁度その時宇宙怪獣が覚醒を開始。なんとか姉さんがそれを抑えようとしたんだ。事実姉さんの能力で十分に抑えられると俺も判断したんだ。……けど、やはり事前に認識をすり合わせておく必要があったんだろうな。手柄を焦った人類が余計な手出しをしてくれたおかげで、見事に姉さんの重力結界は崩壊。ブラックホールから這い上がり、逆にソレを自らの力としたエグゼリヲ重力変動体がついにその姿を顕わにってしまった。

全長一万二千キロメートル。地球よりも尚デカイ怪物だ。姉さんのバスタービームが無効化される光景を見て、正直如何した物かと考えてる俺の視線の先、姉さんに同行していたトップレス、お姉様・ラルク・メルクマーレがその能力を發揮。芯だけになって残されていた雷王星を転移させ、エグゼリヲ変動重力体に直撃させたのだ。

あれにはさすがの俺もビックリした。まさか小規模とはいえ惑星

を、人間が転移させたんだからもう。そりゃ7号系バスター軍団もトップレスを『脅威』と捉えるわ。納得した。

で、更に人類は追撃を掛けようと提案。直撃した雷王星の中心核で縮退連鎖を誘発させて、エグゼリオ重力変動体をブラックホールに押し込もう、と言う作戦を上げたのだ。

これは俺も姉さんも即座に不可能と判断した。何せ相手は『ブラックホールを取り込む能力を持つトップレス』なのだ。此処で新たにブラックホールを生み出したとして、最悪そのブラックホールを取り込まれる可能性はかなり高かった。

更に言うと、仮にブラックホールに閉じ込める事ができたとしても、エグゼリオ重力変動体は何時か必ず開放される。一万二千年での規模まで拡大したエグゼリオ重力変動体だ。そう長い時間をかけずに再び人類の前に現れるだろうその時には、先ず間違いなく今以上の力を得ているであろうことは予想に易い。

ならばこそ、倒すのは今その時を除いて無い。そう判断した俺と姉さんは、即座に行動を開始した。

姉さんは即座に宇宙全域に散らばった自らの手足、7号系無人バスター軍団に召集をかけ、ダイバスターの建造を開始した。

俺はと言えば即座にその場から飛び出し、赤い天の川の一角に隠しておいた自らの戦力を召集。コレを率いて重力変動体への追撃を開始したわけだ。

パリーンと割れる空間から飛び出す俺を見て、目をギョツと見開く帝国軍の連中。通信機越しに見ていたのだけど、あの顔は面白かった。何せ連中は俺の事をお手伝い用アンドロイドと見ていたのに、何時の間にか姉さん——7号と同系統の力を見せているんだから。気分はデンドンマーチだな。……あ、デンドンマーチわからない？ そりゃそうだよな。

そこから重力変動体との亜光速空間での戦闘は……まあ、語るべき物も無い。只単に俺が延々苦戦していただけだからな。

因みにその当時俺がエグゼリオに挑んだ際の戦力だけど、俺を中心システムに据えたガンバスター級8号強化パーツ『シンバスター』、ソ

レに加えて量産無人型シンシズラー級を呼び出せるだけ呼び寄せての大群だった。

因みにシンバスターはガンバスターを外延遊撃部隊の技術で再設計した機体で、俺専用の強化パーツだ。宇宙怪獣との戦いでは、サイズと言うのも結構重要な武器になる。

シンシズラーのほうは、嘗てのガンバスター量産機であるシズラーを、コレも同じく外延遊撃部隊の技術で再設計した期待だ。

共に縮退炉を平均的に装備した機体であり、二桁バスターマシンともエキゾチックマニューバを考慮に入れなければ余裕を持って戦えるほどの性能を持っている。

本来なら俺も惑星規模の集積構造体を構築しての最終決戦んと洒落込みたかったのだが、俺の守備範囲は太陽系外延。つまり全宇宙に俺のシステムは散らばってしまったているのだ。

仮にその時点から招集を掛けたとしても、其処からでは如何足掻いても、地球圏での決戦には間に合わない判断したのだ。

結局俺は持てる限りの戦力を率いて、地球圏到達までに出来る限りエグゼリオ重力変動体を削る消耗戦に挑む事になった、というわけだ。



## 05 別れ

そうして数十分。亜光速でエグゼリオ変動重力源と戦い続けたんだけど、そんな戦いが不意に途切れた。というのもも変動重力源のほうが目標を発見したらしく、其処に向けてワープアウトしたからだ。

変動重力源の動きに合わせて此方もワープアウト。そうして現れたのは、地球の見える位置。太陽系の内側も内側、まさに腹の内と言わすべき位置だ。

こりや不味いと更に猛攻を加えるのだが、やはり惑星サイズの宇宙怪獣と言うのは強い。強いと言うかメチャクチャ硬い。

宇宙怪獣はその共通の弱点として電撃に弱いと言うのがあるのだが、この超巨大宇宙怪獣エグゼリオ変動重力源はその弱点をとある方法でカバーしてしまっている。というのも、このエグゼリオ変動重力源は外殻をかなり分厚くする事で電撃に弱い内臓をしつかりと絶縁してしまっているのだ。

その分厚い外殻は実際凄まじい物で、コレダー攻撃どころかバスタービームでさえもまともに当たらないのだから手のつけようが無い。が、だからといって攻撃の手を緩めるわけにも行かず、延々とエグゼリオ変動重力源を攻撃していたわけなのだが……。

ワープアウトした俺だったのだが、がふと何かを感じて地球の方向に目をやると、其処には何故か光の輪を纏って加速する地球の姿があった。

思わず何やってんの、と叫んだ。あの光の輪はドゥーズミーユ。嘗てバスターマシン三号の建設と同時期に建造された、地球脱出用のシステムだ。地球脱出用と言うか地球が脱出用というか。

まさかあれでエグゼリオ変動重力源から逃げようと言うのか。ソレにしてはエグゼリオ変動重力源に真直ぐ近付いてきていないか。

……まさか、地球をぶつける気か？

思い浮かんだのは、ラルク・メルクマーレがやらかした雷王星を叩き付けるという大技。

確かに物理衝撃としては唯一エグゼリオ変動重力源に大きなダメージを与える事に成功した一撃では有る。のだが、その後雷王星（中心核）は縮退連鎖によってブラックホール化し、エグゼリオ変動重力源の更なるエネルギーとなってしまうている。

仮に地球をぶつけた場合、確かに一撃は有効な打撃を与える事ができるだろう。

が、それだけだ。あのエグゼリオ変動重力源は重力を操る事ができ、更にブラックホールをエネルギーと出来るのだ。先ず間違いなくブラックホールに叩き落したところで再び出てくるし、それどころか地球を食って更に力を増す。人類は母なる地球を失い、更にエグゼリオ変動重力源は力を増す。正に踏んだり蹴つたりの結果しか残らないのは目に見えていた。

牽制を続けて姉さんを待つか、それともドゥーズミューを妨害するか。

悩んでいる間に行動を起したのは、何処からとも無くワープアウトしてきた姉さん——バスターマシン7号だった。

地球圏絶対防衛システムの構造集合体・ダイバスターを纏った姉さんは、そのままドゥーズミューを驚掴みにしてその特攻を阻止。途中ラルク・メルクマーレのエキゾチックドライブによってドゥーズミューが超巨大バスターマシン化したものの、それもラルク・メルクマーレの『あがり』によって停止。今度こそダイバスターはエグゼリオ変動重力源に向って攻撃を開始した。

結果からすると、割と善戦するも、ダイバスターは大破。俺はシンバスターを失って行動不能に。その間に縮退炉を取り込んだデイスヌフ……バスターマシン19号と姉さんが共同でエグゼリオ変動重力源に攻撃。ダブルバスターキックでエグゼリオ変動重力源を撃破。更にそのままエグゼリオ変動重力源が自らのエネルギー源としていたエグゼリオブラックホールをパツカリ割ってしまったのだ。

……ブラックホールが割れるわけ無い？ まあ、そりやそれが当たり前の話だよな。ただ、あの宇宙では物理法則を越えた奇跡のような現象って言うのが極稀に発生するんだよ。

ブラックホールが割れるなんて現象も、そうした奇跡的な確立から引つ張られた事象だったのかもしれないな。

で、割れたブラックホール。そんなモノは物理的に存在しない。存在し無い物が存在した所為で、ブラックホールの特異点が剥き出しになるなんてありえないことが起こってしまったわけだ。

これを姉さんは、即座にダイバスターを構成していたバスターマシン軍団を利用して封印。そのままブラックホールエグゼリオの特異点を持って、多次元宇宙へ運び去ろうとしたわけだ。あのまま放置してれば、ビッグバンで世界が新生されちゃうからな。

……で、それを俺が許さなかったわけだ。

姉さんはな、昔からバスターマシン、ガンバスターのパイロット達にとっても憧れてたんだ。タカヤノリコ、アマノカズミ。特にタカヤノリコに至っては記憶を失って尚、不完全ながら名前を覚えているほどの執着ぶりだ。そんな彼女達が、一万二千年ぶりに漸く帰ってくるというのに、だ。その長い時間を待ち続けた姉さんが、彼女達を迎えられないと言うのは、何か違うだろう。

第一姉さんはバスターマシンであると同時に、誰よりも普通の女の子らしいメンタルを持った存在だ。俺も一般的な人格を自称してこそ居るが、流石に一万二千年も放浪しているとちよつと普通とは言い難い存在になってしまつてる。

でも、それでも姉さんが普通に、普通の女の子として過ごしたかっただと思つていることぐらいは理解できるし、わかる。

——だからこそ、俺は姉さんからブラックホールエグゼリオの特異点を奪い取る事にしたわけだ。

後のことは俺よりもお前のほうが詳しいだろう？

宇宙怪獣は殲滅され、7号——姉さんは世界に帰された。

俺は姉さんから特異点を奪い取り、結果多次元世界の狭間へ飛び出し、特異点の影響で色々な世界を跳ばされ巡りながらこの世界へ流れ着き、お前に回収された……と。

おかげで俺は消耗していたナノマシンやエネルギーなんかを回復させる事ができて、お前さんには感謝しても仕切れない程なんだけど……。

ん？ 俺の話しに聞いた事の有る単語がある？ ほお、この世界にも宇宙怪獣が『存在した』のか。へえ、でも英雄達によってそれは斃されたよ。

……へえ？ この世界でもガンバスターが開発されたって？ それはまた。案外この世界って俺の居たところとかなり近い世界なのかも。それじゃ案外この世界の俺とか姉さんとかが何処かに居たりして。

……あー、それは無いの？ 地球帝国宇宙軍じゃなくて地球連邦なるほど。ガンバスターは純然たる対宇宙怪獣用戦力として開発されて、見事宇宙怪獣の掃討を成功させたよ。他の参加戦力は——ダンクーガにイデオンにガオガイガー、ガンダムにマシンガーにゲッターに超電磁ロボとマクロス……。

知っているのかって？ あー、まあ、知っている。

そーかそーか……此処α外伝か。んじゃメイガスのメイガスって、メイガスなのか……。

何言っているのか解らないって？ まあ、別にたいした話じゃないんだよ。でもおかげで納得は出来たかな。通りで異世界って話に簡単に納得してくれた上に、世界間転移装置のデータなんて物が残っていたわけだ。これ、つまりシステムNXなのか……αなのに？

んー、でもメイガスだし……α外伝前日？この後活動を開始するわけかな？ 空白期に影鏡が来た可能性も……うーん？

と、なるとだ。この世界から旅立つ前に、先に色々調べてみるのも悪くないかもな。▽とかのデータも得られるかもだし。というかゲシユペンストがほしいです。スレードゲルミルはイラネ。

よし、そうと決まれば事は迅速に。

メイガス、PTを一機貸してくれないか？　ちよつとこの世界を見て回りたくなつたんだ。

ついでに人類の価値も調べてほしい……ってそれは自分で判断しろよ。寧ろ俺が定期的にソツチにデータを送ろうか？　俺の経験から直接人類を見てみるつてのも一つの選択肢に成るだろう？

ま、いいさ。取り敢えずのところ、俺の過去話はこんなところだな。微妙だったろ？

……案外面白かったが、もう少し細かい描写を入れてほしい……何処の編集長だよお前。

ん、次に行った世界の話をしてほしい？　まあ、データベースから情報を貰う対価って考えれば安い対価なんだけど、まあ、とりあえず今回は一端此処まで、かな。

続きはまたそのうちに。